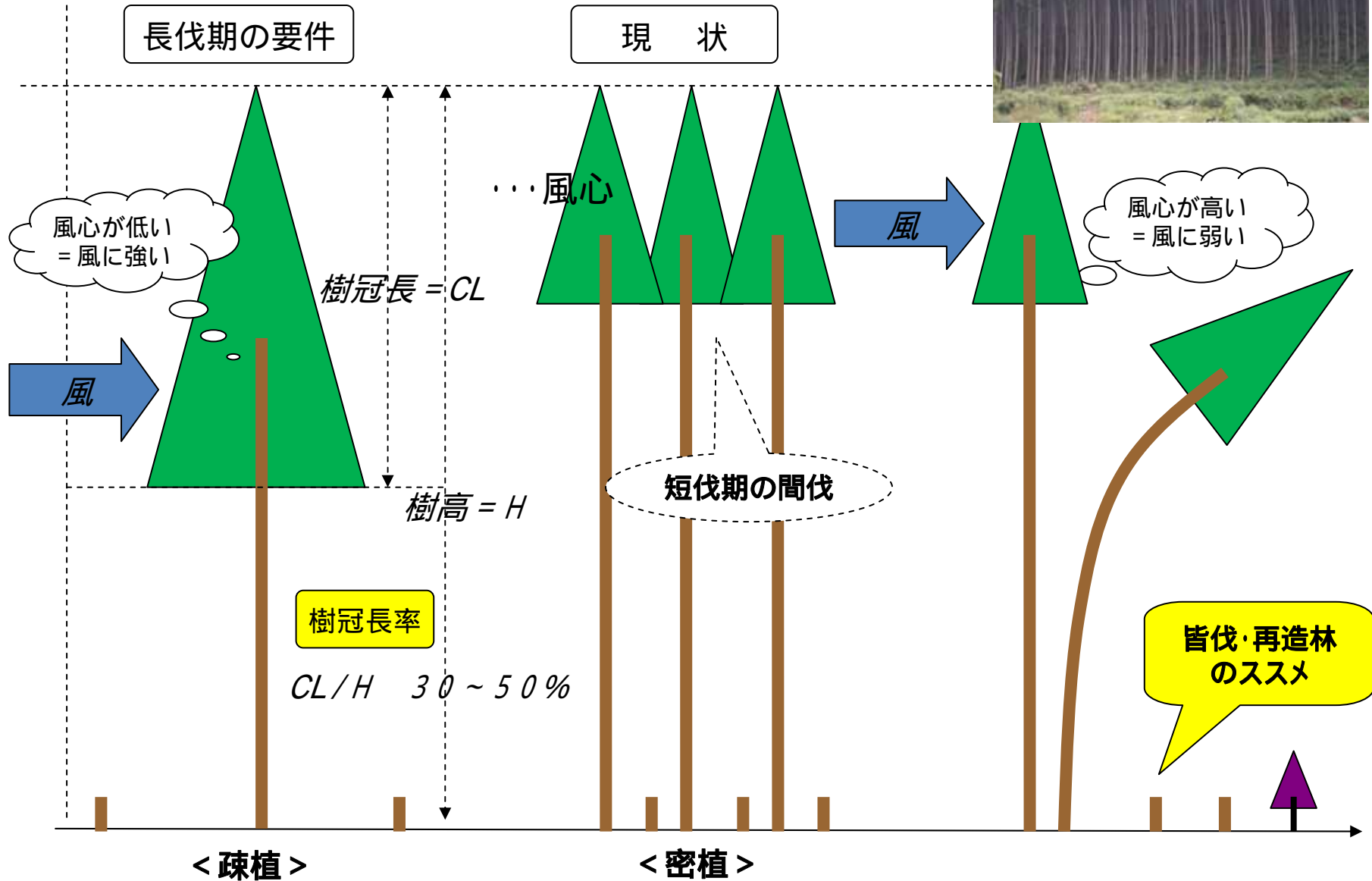


長伐期移行は可能か？





長期育成循環林へ誘導する際の技術的判断基準 (第1世代の森林づくり)

(1) 樹冠長率(形状比)に関して

林業普及双書N0.153 長伐期林を解き明かす 藤森 隆郎

・30年生以上で樹冠長率30%以下の木は、残しても肥大成長はあまり期待できない。樹冠長率が低く、形状比の高い林分は、耐風性が低く、仮に強風で倒れたり、折れなくても、材にもめ、目回りが生じやすい。

(耐風性の高い森林にするための目標値) 樹冠長率:50%以上、形状比70以下

樹冠長率30%未満の森林は、長伐期に移行すべきではなく、あえて間伐遅れ林分を長伐期に誘導する場合、樹冠長率の高い、形状比の低い木を優先的に残す。伐っても採算が合わない場合、強度の切り捨て間伐を行い、針広混交林化も検討するべきであるとしている。

・九州のさし木造林地における間伐手遅れの基準は不明確であり、九州試験研究機関の育林メンバーを中心とした人工林管理分科会において、樹冠長率や形状比での判断基準を検討予定

(2) スギ品種に関して

・H20～21; 長伐期化に対応するスギ品種特性の解明に関する研究で、スギ在来品種の長伐期特性を評価(アヤスギ、ヤブクグリ、ササンノスギ、メアサ、オビスギ系)

・長伐期に向く品種として、九州中南部の社寺等21ヵ所での老齢木を調べた結果、95%はメアサであった事例もあり(家入 2003)、高齢木が多く残っている等の理由から、**一般にメアサが長伐期向きの品種として推奨**されている。

・メアサは、90年生を越えても間伐強度が強いほど生長量の増加を確認(鈴木ら 2009)

・リュウノヒゲは、50年生前後からスギこぶ病の発生が多く見られ、急激な成長量の低下がみられる。



